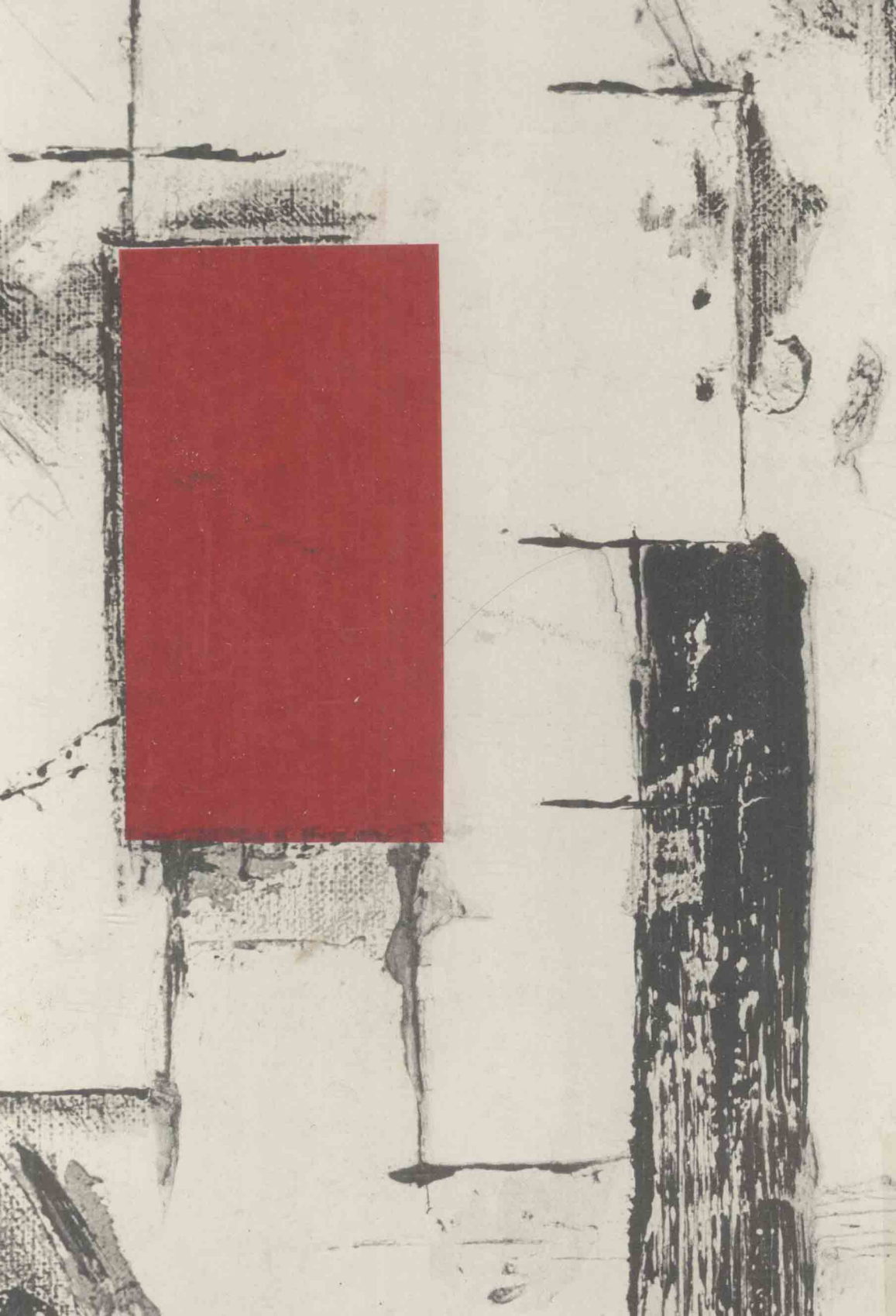

機械

横光利一 著

白水社版

第一刷

昭和六年四月五日印刷
昭和六年四月十日發行

定價二圓

著作者　横光利一

發行者　株式會社白水社
代表者　福岡セイ
東京市神田區小川町三〇

印刷者　村田豐吉
東京市京橋區新榮町五丁目七番地

印刷所　株式會社大倉印刷所
東京市京橋區新榮町五丁目七番地

製本所　中野製本所

發行所　株式會社白水社
東京市神田區小川町三〇
電話神田三五九八
振替東京一一九二二

特選　名著複刻全集　近代文学館　昭和46年5月

機械目次

機械……五頁
時間……五五頁
鞭……九五頁
鳥……一一三頁
高架線……一四九頁
眼に見えた虱……一七七頁
父母の眞似……二二七頁
惡魔……二四三頁

佐野繁次郎裝幀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

機

械

初めの間は私は私の家の主人が狂人ではないのかとときどき思つた。觀察してゐるとまだ三つにもならない彼の子供が彼をいやがるからと云つて親父をいやがる法があるかと云つて怒つてゐる。疊の上をよちよち歩いてゐるその子供がぱつたり倒れるといきなり自分の細君を毆りつけながらお前が番をしてゐて子供を倒すと云ふことがあるかと云ふ。見てゐるとまるで喜劇だが本人がそれで正氣だから反對にこれは狂人ではないのかと思ふのだ。少し子供が泣きやむともう直ぐ子供を抱きかかへて部屋の中を馳け廻つてゐる四十男。此の主人はそんなに子供のことばかりにかけてさうかと云ふとさうではなく、凡そ何

事にでもそれほどな無邪氣さを持つてゐるので自然に細君が此の家の中心になつて來てゐるのだ。家の中の運轉が細君を中心にして來ると細君系の人人がそれだけのびのびとなつて來るのももつともなことなのだ。從つてどちらかと云ふと主人の方に關係のある私は此の家の仕事のうちで一番人のいやがることばかりを引き受けねばならぬ結果になつていく。いやな仕事、それは全くいやな仕事で然もそのいやな部分を誰か一人がいつもしてゐなければ家全體の生活が廻らぬと云ふ中心的な部分に私がゐるので實は家の中心が細君にはなく私にあるのだがそんなことを云つたつていやな仕事をする奴は使ひ道のない奴だからこそだとばかり思つてゐる人間の集りだから默つてゐるより仕方がないと思つてゐた。全く使ひ道のない人間と云ふものは誰にも出來かねる箇所だけに不思議に使ひ道のあるもので、此のネームプレート製造所でもいろいろな藥品を使用せねばならぬ仕事の中で私の仕事だけは特に劇藥ばかりで滿ちてゐて、わざわざ使ひ道のない人間を落し込む穴のやうに出來上つてゐるのである。此の穴へ落ち込むと金屬を腐蝕させる鹽化鐵で衣類や皮膚

がだんだん役に立たなくなり、臭素の刺戟で咽喉を破壞し夜の睡眠がとれなくなるばかりではなく頭腦の組織が變化して來て視力さへも薄れて來る。こんな危險な穴の中へは有用な人間が落ち込む筈がないのであるが、此の家の主人も若いときに人の出來ないこの仕事を覺え込んだのも恐らく私のやうに使ひ道のない人間だつたからにちがひないのだ。しかし、私とてもいつまでもここで片輪になるために愚圖ついてゐたのでは勿論ない。實は私は九州の造船所から出て來たのだがふと途中の汽車の中で一人の婦人に逢つたのがこの生活の初めなのだ。婦人はもう五十歳あまりになつてゐて主人に死なれ家もなければ子供もないので東京の親戚の所で暫く厄介になつてから下宿屋でも初めるのだと云ふ。それなら私も職でも見つかればあなたの下宿へ厄介になりたいと冗談のつもりで云ふと、それでは自分のこれから行く親戚へ自分といつてそこの仕事を手傳はないかとすすめてくれた。私もまだどこへ勤めるあてとてもないときだしひとつはその婦人の上品な言葉や姿を信用する氣になつてそのままふらりと婦人と一緒にここの仕事場へ流れ込んで來たのである。す

ると、ここの仕事は初めは見た目は樂だがだんだん藥品が勞働力を根柢から奪つていくと云ふことに氣がついた。それで明日は出やう今日は出やうと思つてゐるうちにふと今迄辛抱したからにはそれではひとつここの仕事の急所を全部覺え込んでからにしようと云ふ氣にもなつて來て自分で危險な仕事の部分に近づくことに興味を持たうとつとめ出した。ところが私と一緒に働いてゐるここの職人の輕部は私が此の家の仕事の秘密を盜みに這入つて來たどこかの間者だと思ひ込んだのだ。彼は主人の細君の實家の隣家から來てゐる男なので何事にでも自由がきくだけにそれだけ主家が第一で、よくある忠實な下僕になりすましてみることが道樂なのだ。彼は私が棚の毒藥を手に取つて眺めてゐるともう眼を光らせて私を見詰めてゐる。私が暗室の前をうろついてゐるともうかたかたと音を立てて自分がここから見てゐるぞと知らせてくれる。全く私にとつては馬鹿馬鹿しい事だが、それでも輕部にしては眞劍なんだから無氣味である。彼にとつては活動寫眞が人生最高の教科書で從つて探偵劇が彼には現實とどこも變らぬものに見えてゐるので、此のふらりと這入つて來

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た私がさう云ふ彼にはまた好箇の探偵物の材料になつて迫つてゐるのも事實なのだ。殊に輕部は一生此の家に勤める決心なばかりではない。此處の分家としてやがては一人でネームプレート製造所を起さうと思つてゐるだけに自分よりさきに主人の考案した赤色プレート製法の秘密を私に奪はれて了ふことは本望ではないにちがひない。しかし、私にしてみればただ此の仕事を覺え込んでおくだけでそれで生涯の活計を立てようなどとは謀んでゐるのでは決してないのだが、そんなことを云つたつて輕部には分るものでもなし、また私が此の仕事を覺え込んで了つたならあるひはひよつこりそれで生計を立てていかぬとも限らぬし、いづれにしても輕部なんかが何を思はふとただ彼をいらいらさせてみるのも彼に人間修養をさせてやるだけだとぐらゐに思つてをればそれで良ろしい、さう思つた私はまるで輕部を眼中におかずにゐると、その間に彼の私に對する敵意は急速な調子で進んでゐて此の馬鹿がと思つてゐたのも實は馬鹿なればこそこれは案外馬鹿にはならぬと思はしめるやうにまでなつて來た。人間は敵でもないのに人から敵だと思はれることはその期間相

手を馬鹿にしてゐられるだけ何となく樂しみなものであるが、その樂しみが實はこちらの空隙になつてゐることにはなかなか氣付かぬもので私が何の氣もなく椅子を動かしたり斷裁機を廻したりしかけると不意に金槌が頭の上から落つて來たり、地金の眞鍮板が積み重つたまま足もとへ崩れて來たり安全なニスとエーテルの混合液のザボンがいつの間にか危險な重クロムサンの酸液と入れ換へられてゐたりしてゐるのが初めの間はこちらの過失だとばかり思つてゐたのにそれが盡く輕部の爲業だと氣付いた時には考へれば考へるほどこれは油斷をしてゐると生命まで狙はれてゐるのではないかと思はれて來てひやりとさせられるやうにまでなつて來た。殊に輕部は馬鹿は馬鹿でも私よりも先輩で劇藥の調合にかけては腕があり、お茶に入れておいた重クロム酸アンモニアを相手が飲んで死んでも自殺になるぐらゐのことは知つてゐるのだ。私は御飯を食べる時でもそれから當分の間は黄色な物が眼につくとそれが重クロムサンではないかと思はれて箸がその方へ動かなかつたが、私のそんな警戒心も暫くすると自分ながら滑稽になつて來てさう手容く殺されるものなら

殺されてもみようと思ふやうにもなり自然に輕部の事などは又私の頭から去つていつた。

或る日私は仕事場で仕事をしてゐると主婦が來て主人が地金を買ひにいくのだから私も一緒について行つて主人の金錢を絶えず私が持つてゐてくれるやうにと云ふ。それは主人は金錢を持つと殆ど必ず途中で落して了ふので主婦の氣使ひは主人に金錢を渡さぬことが第一であつたのだ。いままでの此の家の悲劇の大部分も實に此の馬鹿げたことばかりなんだがそれにしてもどうしてこんなにこの主人は金錢を落すのか誰にも分らない。落して了つたものはいくら叱つたつて嚇したつて返つて來るものでもなし、それだからつて汗水たらして皆が働いたものを一人の神經の弛みのために盡く水の泡にされて了つてそのまま泣き寢入に默つてゐるわけにもいかず、それが一度や二度ならともかく始終持つたら落すと云ふことの方が確實だと云ふのだから此の家の活動も自然に鍛錬のされ方が普通の家とはどこか違つて生長して來てゐるにちがひないのだ。いつたい私達は金錢を持つたら落すと云ふ四十男をそんなに想像することは出來ない。譬へば財布を細君が紐でしつかり首か

ら懷へ吊しておいてもそれでも中の金錢だけはちやんといつも落してあると云ふのであるが、それなら主人は金を財布から出すときか入れるときかに落すにちがひないとしてみてもそれにしても第一さう度度落す以上は今度は落すかもしれぬからと三度に一度は出すときや入れるときに氣附く筈だ。それを氣附けば事實はそんなにも落さないのではないかと思はれて考へやうによつてはこれは或ひは金錢の支拂ひを延ばすための細君の手ではないかとも一度は思ふが、しかし間もなくあまりにも變つてゐる主人の擧動のために細君の宣傳もいつの間にか事實だと思つてしまはねばならぬほど、とにかく、主人は變つてゐる。金を金とも思はぬと云ふ言葉は富者に對する形容だが此處の主人の貧しさは五錢の白銅を握つて錢湯の暖簾をくぐる程度に拘らず、困つてゐるものには自分の家の地金を買ふ金錢まで遣つてしまつて忘れてゐる。かう云ふのをこそ昔は仙人と云つたのであらう。しかし、仙人と一緒にゐるものは絶えずはらはらして生きていかねばならぬのだ。家のことを何一つ負かしておけないばかりではない、一人で濟ませる用事も二人がかりで出かけたり

その一人のゐるために周圍の者の勞力がどれほど無駄に費されてゐるか分らぬのだが、しかしそれはさうにちがひないとしても此の主人のゐるゐないによつて得意先の此の家に對する人氣の相異は格段の變化を生じて來る。恐らく此處の家は主人のために人から憎まれたことがないにちがひなく主人を縛る細君の締りがたとひ惡評を立てたとしたところでそんなにも好人物の主人が細君に縛られて小さく忍んでゐる樣子と云ふものはまた自然に滑稽な風味があつて喜ばれ勝ちなものでもあり、その細君の睨みの留守に脫兎のごとく脫け出してはすつかり金錢を振り撒いて歸つて來る男と云ふのもこれまた一層の人氣を立てる材料になるばかりなのだ。

そんな風に考へると此の家の中心は矢張り細君にもなく私や輕部にもない自ら主人にあると云はねばならなくなつて來て私の傭人根性が丸出しになり出すのだが、どこから見たつて主人が私には好きなんだから仕樣がない。實際私の家の主人はせいぜい五になつた男の子をそのまま四十に持つて來た所を想像すると浮んで來る。私たちはそんな男を思ふと

全く馬鹿馬鹿しくて輕蔑したくなりさうなものにも拘らずそれが見てゐて輕蔑出來ぬと云ふのも、つまりはあんまり自分のいつの間にか成長して來た年齡の醜さが逆に鮮かに浮んで來てその自身の姿に打たれるからだ。こんな自分への反射は私に限らず輕部にだつて常に同じ作用をしてゐたと見えて、後で氣付いたことだが、輕部が私への反感も所詮は此の主人を守らうとする輕部の善良な心の部分の働きからであつたのだ。私が此處の家から放れがたなく感じるのも主人のその此の上もない善良さからであり、輕部が私の頭の上から金槌を落したりするのも主人のその善良さのためだとすると、善良なんて云ふことは昔から案外良い働きをして來なかつたにちがひない。

さてその日主人と私は地金を買ひにいつて戻つて來るとその途中主人は私に今日はかう云ふ話があつたと云つて云ふには自分の家の赤色プレートの製法を五萬圓で賣つてくれと云ふのだが賣つて良いものかどうだらうかと訊くので、私もそれには答へられずに默つてゐると赤色プレートもいつまでも誰れにも考案されないものならともかくもう仲間達が必

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com